

視線と対象

—三項関係による知覚論の再構築—

柴田健志

はじめに

自分のまわりにある対象がどのような性質をもっているかを知覚することは、人間にとつてきわめて重要なことである。では、対象の性質は、いったいどうやって知覚されているのであろうか。哲学および心理学における従来の知覚論は、知覚の問題をつねに対象と知覚者のあいだの二項関係として理解しようとしてきた。しかし、対象の性質は、他者を介した三項関係の中で知覚されている場合がある。例えば、道具の性質（何をやるものなのか）は、他者が実際に道具を使用するのを見ることをとおして知覚されていると考えられる。このようなケースは、従来の知覚論においては、主要な問題とされてこなかった。なぜなら、対象の性質の知覚は、基本的に二項関係において理解すべきものであり、三項関係はむしろ特殊なケースとみなされてきたからである。しかし、三項関係は決して特殊ではない。それどころか、対象の性質の知覚は、つねに三項関係にもとづいて成立しており、二項関係は見かけ上のものにすぎない、とさえ考えられるのである。他者の「視線 (gaze)」のはたらきに

着目することによって、この点を主張したのが以下の論考である。

1 視線の意味

対象の性質が三項関係の中で知覚される事例として、アフォーダンスの知覚を考えてみよう。アフォーダンスとは、人間が対象にはたらきかけることによつて顕現するような性質である。例えば、「缶切り」のアフォーダンスは缶のふたを開けることである。このような性質はたんに「缶切り」を観察しただけでは知覚されることができない。実際にこの道具を使用することで、はじめて知覚されるような性質である。このような性質が三項関係の中で知覚されるということは、ようするに他者が「缶切り」を使用するのを見ることによつて、その使い方を知るということである。

このような場合、他者の「視線」が本質的な役割を果たしている、という点に注目しなければならない。具体的にいえば、誰かが「缶切り」を使用しているのを見ても、そこに「視線」が感知されていなければ、言い換えれば、「ジョイント・アテンション」⁽¹⁾が成立していなければ、「缶切り」の性質は知覚されないと考えられるのである。この意味で、対象に向けられた他者の「視線」は、三項関係において対象の性質が知覚されるための不可欠の条件であると考えられるのである。この点は神経科学の分野においてすでに実証されている⁽²⁾。この点が確認されたとすると、次のように問いかけることができるであろう。

他者が対象にはたらきかける場合にあってはまることは、私が対象には

たらきかける場合にも、同様にあてはまると考えられないであろうか。すなわち、他者が対象にはたらきかけるのを知覚するのではなく、自分で対象にはたらきかける場合にも、そのはたらきかけによって対象のフォードダンスが顕現する条件は、私が他者の「視線」を感知していることにあるのではないかと。

この問いは、私と対象との二項関係における知覚の構造を三項関係に置き換えて理解する、という形で展開できる。私と対象との見かけの二項関係は、暗黙に他者の「視線」を想定した三項関係としてとらえ直すことができるのである。この主張を展開するにあたって重要な点は、なぜそのような考えなければならないかを明示的に議論することである。したがって、論文の後半部分（3および4）はすべてこの議論に費やされている。論文の前半部分（1および2）では、あらゆる知覚は三項関係という構造をもつという視点そのものが成立する可能性をまず議論しなければならない。

対象の性質は、他者を介した三項関係において知覚される以外に、対象と知覚者という二項関係において知覚されることがある。いや、通常は、二項関係のほうが標準的なケースとみなされている。「缶切り」の性質は、自分でそれを使ってみれば分かるからである。ここからみれば、三項関係はむしろ偶然的なケースである。つまり、本来は二項関係において知覚しうるものが、三項関係においても知覚されうるというにすぎない。

しかし、私の考えによれば、事実はまったく逆である。見かけの二項関係は、じつはすべて暗黙の三項関係という構造をもっているはずである、と考えられるからである。たしかに、ほとんどの場合、対象の性質

が見かけの上では二項関係において知覚されているということは事実である。哲学および心理学の知覚論において、二項関係が標準的なものとして受入れられてきた理由もここにある。しかし、見かけ上は二項関係において対象の性質が知覚されている場合にも、他者の「視線」だけにはつねに感知されている、と考えることは可能である。「視線」とは、他者がその場に現前していなくても感知されるものである、と考えられるからである。見かけの二項関係はすべて暗黙の三項関係であると主要しうる理由はここにある。つまり、他者は「視線」という形で私の知覚に介入している、と考えることが、この主張のポイントとなっている。

「視線」にこのような役割を認めた上で、私の主張したい考えをまとめると、それは次のように表現することができる。対象の性質は、他者の「視線」の下で、はじめて私に顕現する、と。私自身が対象の性質を見出した場合にも、対象に向けられた他者の「視線」は、そこにかかわっていないなければならないのである。

問題は、他者が実際には対象にはたらきかけておらず、また他者の身体そのものも現前していない場合でも、その「視線」だけは感知されるという主張が妥当性をもっているかどうかである。この点を明確にするために、まず次のように考えてみよう。他者の「視線」は、その行為とは分離して感知されるものである。この点は、やはり神経科学の分野において実証されている^(三)。ここから一歩進めて、「視線」はまた、それが帰属する他者の身体が現前していなくても、私に感知される、と考えることができるであろうか^(四)。

もしこの論理が認められれば、二項関係から三項関係への置換えは成立するであろう。他者の行為が対象の性質を私に顕現させる(三項関係)

ために、他者の「視線」が不可欠であるとすれば、私の行為が対象の性質を私に顕現させる（二項関係）ためにも、じつは他者の「視線」が不可欠である（暗黙の三項関係）と考えることができるからである。無議論、

すでに指摘したとおり、この考えに対しては、なぜそんなふうを考えなければならぬか、という問いかけがありうる。きわめて基本的かつ的確な問いかけである。他者の「視線」は、他者の行為が意味をもつためにだけ不可欠である、と考えることも可能だからである。くり返しになるが、この問いかけに対する回答は論文の後半部分に譲ることにする。

以下では、アフォードダンスの知覚論を題材にして、二項関係を三項関係に置き換えるという着想をさらに敷衍して示してみることにする。ジェームズ・ギブソンのアフォードダンスの理論を発達心理学に適用して成功を収めたエレノア・ギブソンの理論が検討の対象になる。ジェームズ・ギブソンではなく、あえてエレノア・ギブソンのほうを取り上げる理由は、それが知覚の発達理論であるがゆえに、他者の模倣という三項関係を争点にしうるからである。アフォードダンスとは、人間のはたらきかけによって顕現する対象の性質を指し、したがって二項関係と三項関係（私のはたらきかける場合と他者のはたらきかけるのを私が見る場合）を同時に含んでいる。ところが、エレノア・ギブソンは二項関係を理論の中心に置いていた。したがって、模倣という三項関係は重視されていない。この点に着目することによって、二項関係を三項関係に置き換える議論を、より具体的な文脈で敷衍してみなければならぬ。

ただし、知覚の三項関係モデルは、アフォードダンスにのみ妥当するものではない。むしろ、対象の性質が知覚される構造は、すべて三項関係になっている、というのが私の主張である。アフォードダンスへの言及は、

あくまでも典型的な事例としての言及であるにすぎない。

2 知覚の構造

他者のはたらきかけによって顕現する対象の性質の典型的なもの、道具の性能である。「缶切り」や「栓抜き」の性能は、誰かがそれを適切に使用しているのを見なければ、普通は知覚されることができないであろう。実際、「缶切り」や「栓抜き」の使い方は、そんなふうにして学習されている。これらの道具の性能は、初心者が独力で検出することが困難なものである。言い換えると、二項関係においては容易に知覚されるができないものである。

しかしながら、このような主張には次のような反論が予想される。確かに、道具の性能は、他者が実際にそれらを使用するのを見ることが容易に検出されうるが、そのような性質にしても、本来は二項関係において検出可能なものであって、他者を介して知覚されるべき必然性はない、と。実際、エレノア・ギブソンはそのような立場をとっている。エレノア・ギブソンは、アフォードダンスの知覚に他者が関わるということがあるという点は認めた上で、それが本質的なものであるという点を否定する。彼女にとって、対象のアフォードダンスは二項関係において検出可能なものなのである^(五)。事実、エレノア・ギブソンは、知覚の発達における模倣の重要性を示したメルツォフの一連の実験の意義を認めるが、他者の行為を見ることは、アフォードダンスそのものを知覚することであるよりも、むしろアフォードダンスの知覚を促進するものであるにすぎない

いとしている^(六)。

じつは私も、「缶切り」や「栓抜き」の性能を知覚するためには、他者がそれらを使用しているのを実際に見ることは、それほど重要なことではないと考えている。他者がこれらの道具を実際に使用していることではなく、むしろ他者の「視線」がそれらに向けられていることの方が重要であると考えられるからである。

とはいえ、べつに私は、誰かが実際に「缶切り」や「栓抜き」を使っ
て見せなくても、ただそれらの対象に「視線」を向けるだけで、その性能が知覚されると主張しているのではない。そんなことは不可能である。私は「視線」にそのような魔術的な力を認めているわけではない。他者が「視線」を向けることによつて、未知の性質がただちに顕現するはずはないのである。

私はただ、他者の「視線」が感知されていれば、実際に道具にはたつきかけるのが他者である必要はない、と主張したいだけである。他者がはたつきかけなくても、自分ではたつきかければよいのである。すでにその道具のアフオーダンスを知っている他の誰かがそれを使用するのを見た方が、自分で一から始めるよりも早いというだけのこと、どうしても他者から学ばねばならぬという必然性はない。つまり、アフオーダンスが検出されるためには、他者の「視線」は不可欠であるが、対象にはたつきかけるのが他者である必要はない、というのが私の主張である。

そこで、対象の性質は、対象への他者のはたつきかけを見ることなしに、知覚者が対象との二項関係において検出しようという点だけに着目すれば、エレノア・ギブソンの主張と私の主張には大差ない。しかし、基本的なところではまったく異なる。私にとつて、対象の性質を知覚す

るために、他者のはたつきかけが必要とされないということは、他者の「視線」があれば十分であるという意味である。これに対し、エレノア・ギブソンにとつて、他者のはたつきかけが必要とされないということは、端的に他者は必要ないということの意味するのである。

対象の性質が知覚されるにあたって、他者の「視線」がどのような役割を果たしているかという点に関する私の提案は以上のようなものである。私は、三項関係において対象の性質が知覚される条件は、対象に向けられた他者の「視線」であるという主張を一步進め、他者の「視線」が感知されていれば、実際に対象にはたつきかけるのは、他者でも自己でもありうると考えたのである。この考えにしたがえば、対象の性質が二項関係において検出され、知覚されているように見える場合にも、他者の「視線」だけは感知されていることになる。

この考えをもう少しだけ前に進めてみよう。エレノア・ギブソンにとつて、私が対象のアフオーダンスを検出するにあたって、他者の「視線」などは何の役割も果たしていない。それは、知覚の理論には余分なものである。確かに、対象のアフオーダンスを検出する作業は、対象との二項関係における試行錯誤によつて検出される場合も多い。しかし、そこに他者の「視線」は本当に含まれていないのである。現実には他者がその対象に「視線」を向けていない場合でも、他者の「視線」が想定された上で対象が知覚されていると考えられないであろうか。無論、私はそう考えている。どのような対象の知覚にも、他者の「視線」が暗黙に前提されており、したがって対象はつねに他者の「視線」の下で知覚されている、と考えられるのである。言い換えれば、私の対象知覚を成立させる構造として、他者の「視線」を理解することができるのである。

このような理解にたてば、私が対象にはたつきかけることによって、何らかの性質を検出することができるのは、他者の「視線」が暗黙に想定された三項関係の中においてであるということになる。もし三項関係という構造の中で知覚がなされていないなら、対象の性質は検出できないと考えられるのである。ここからみると、エレノア・ギブソンが知覚のモデルとしている二項関係（知覚者と対象）は、見かけ上のものではないと考えられるのである。

以上のように、他者が現前しない場合にも、その「視線」は感知されており、私が対象の性質を知覚する条件になっている、と考えられる。では、なぜそんなふうを考えなければならぬのであろうか。この問いかけに回答してみなければならぬ。

3 性質の実在性

私がどのような対象を見るときにも、私は他者の「視線」を介してそれを見る。ただし、そのために他者が現前している必要はない。他者の「視線」は、知覚が成立するための暗黙の構造として要求されるのである。このように、従来の知覚論が想定してきた対象と知覚者の二項関係は、じつは他者の「視線」によって支えられた暗黙の三項関係である。これが私の提案したい主張である。では、なぜそのように考えなければならぬのであろうか。

この主張の意味を明確にするための手がかりは、知覚される対象の性質が、通常は実在的なものとして知覚されているという点にある。対象の性質が実在的であるということは、それが私の想像などではなく、対

象そのものが持っている認められる性質である、という意味である。例えば、鉛筆にはそれを使って文字を書くことができるという性質がある。これは鉛筆の実在的な性質である。では、鉛筆を使えば知らない文字でも書くことができるのであろうか。もちろん、そんなことは不可能である。鉛筆はそのような性質を持っていないからである。しかし、そういう性質を鉛筆に持たせることは、想像の中でなら可能である。

このように、ある対象の実在的な性質と、その対象についての主観的な想像とは、つねに区別されているが、その区別がどのようにしてなされているかは、ほとんど注意されていない。しかし、実際にはそれらを区別しているものが存在するはずである。私の考えによれば、それが他者の「視線」である。他者の「視線」の下で知覚された性質だけが実在的な性質として認定されるのである。ただし、他者の「視線」とは、自分と同じように対象を見る存在としてではなく、むしろ反対に、自分とは異なった視点から対象を見る存在を示しているがゆえに有効である、と考えられるのである。

私は、私以外の視点の存在に気づきながら、決して自分でその視点から対象を見ることはできない。なぜなら、他者の視点とは、私の視点とは異なる視点であり、したがってもし私が他者の視点に立つことができると想定するなら、その視点はすでに私の視点にすぎず、もはや他者の視点とはいえないからである。つまり、他者の「視線」を感知するということは、自分には決して見ることでできない仕方では対象を見ることができない視点の存在を認識するということを意味している。

では、この認識は、いったい何を意味するのであろうか。この認識は、対象に対する私の視点を否定するような仕方では与えられるものであ

る。それゆえに、私がたんに自分の視点からおこなう主観的な想像ではなく、むしろ想像を超えた実在的な性質が存在するという点を、私に示すのである。対象へのはたらきかけが意味を持つのは、この点が認識される限りにおいてでなければならぬ。対象に対する主観的な視点の否定によって、対象へのはたらきかけが実在的な性質の検出作業という意味を持つことになるのである。私の主観は、対象がどのような性質を示すかをあらかじめ予測することはできない。しかし、それが予測できないのは、未知の対象だからというわけではない。むしろ、その対象が他者の「視線」の下に置かれることによって、私の視点からは決して見ることのできない面を持つことが認識されるからである。

無論、他者にとっては私の「視線」が同じ機能をもつであろう。各々にとつての他者の「視線」の機能は、自分の視点を否定することによって、実在的な性質の存在を示すことにあると考えられるのである。そのような性質は、各々が自己の視点を否定することによって到達すべき性質として考えられるのである。

対象の性質の知覚とは、他者の「視線」に支えられた三項関係であると考えなければならぬ理由についての、私の考察は以上のとおりである。考察のポイントをひとことといえ、対象は、それが他者の「視線」の下に置かれない限り、知覚者に対して実在的な性質を持つものとして認知されえず、したがって想像的な性質と実在的な性質の区別が消滅するのである、という点にある。二項関係においては、対象の性質の実在性は、本来は問題にできないはずなのである。ところが、事実として、対象の性質ということがいわれるときには、明示的ではなくとも、つねに実在的な性質という意味でそういわれている。このことは、対象の

性質が二項関係において知られるという考えを、現実に否定していると考えられるのである^七。

ところで、対象の実在的な性質をいかにして認識するかという問題は、デカルト以来の近世哲学における知覚の理論の重要問題であった。そこで、以下ではデカルトおよびライプニッツの知覚の理論をとりあげ、三項関係モデルを使ってそれらを読み直してみよう。

私の考えによれば、デカルトおよびライプニッツの知覚論は、どちらも三項関係モデルに書き直すことができるものである。しかしまた、それらは三項関係モデルとしてはじつは十分ではない。では、このことは何を意味するのか。この点を問いつめていくことによって、今述べた三項関係モデルの特徴をより明確なものにすることが、以下の哲学的考察のねらいである。

4 哲学的考察

知覚の三項関係モデルは次の二つの主張から構成されている。

- (1) 他者の「視線」が対象の実在的な性質の存在を示唆する。
- (2) 対象の実在的な性質は、想像的な性質と異なり、対象へのはたらきかけによって顕現する性質である。

重要なことは、この両者をひとつの論理の中で主張することである。

なぜなら、(1)の主張のみでは、他者の「視線」が示唆する実在的な性質をいかにして検出するかという方法が欠落しており、その点で十分な理論とは認められない。また(2)の主張のみでは、対象へのはたらしかけが、なぜその実在的な性質を顕現させる方法として認められるかが不明になってしまうからである。

(一) デカルト

哲学史上、(1)の主張は、まずデカルトの哲学の中に見出すことができる。デカルトのいう「欺く神」こそ、「私」とは異なった視点から世界を見る他者の「視線」にほかならない。「欺く神」の存在を想定することによって、外的世界の知覚において、「私」が欺かれている(誤謬を犯している)かもしれない可能性をデカルトは指摘する⁽⁶⁾。つまり、「神」という他者の「視線」によって、「私」の視点が否定され、「私」にはまだ顕現していないような、世界の実在的な性質の存在が認められているのである。そのような実在的な性質を探求するにあたって、デカルトは「想像」を否定している。主観的な想像による性質とは異なった性質が問題だからである。『第二省察』における「蜜蠟」の分析において、「この蜜蠟が何であるかを、私は、決して想像する(imagineri)のではなく、もっぱら精神によってとらえるのである」⁽⁷⁾と、デカルトは述べている。

このように、デカルトにおいては、他者の「視線」を媒介にして、世界ないし対象の実在的な性質の探求の必要性が訴えられる、という論理が見出される。しかし、デカルトはこの論理を、対象へのはたらしかけによって実在的な性質を検出する方法へと展開させなかった。デカルト

のとつた方向は、「私」が「明晰かつ判明」に認識する性質が対象の実在的な性質である、というものであった。それは、意識の内部で想像的な性質と実在的な性質を区別できる、という考えにもとづいている。

しかし、このようにして見出された実在的な性質は、本当に現実的な意味を持つことができるであろうか。対象へのはたらしかけなしに、たんに意識の内部での操作によって見出された性質を対象が現実を持っている性質として認めてよいであろうか。このような問いかけに、デカルトはもちろん気づいていたと思われる。なぜならデカルトは、「実在的」という言葉を、あえて「存在することが可能である」という意味に解して用いているからである。それは、「神によってつくられる(Dei posse)」⁽⁸⁾と表現されている。「つくられる」のであって、現実には「つくられた」というのではない。つまり、デカルトは、現実性の概念を含まない実在性の概念を作り出すことで、この問いかけに答えているのである。

結局、デカルトにおいて、他者の「視線」の存在が、知覚者を実在的な性質の探求に向かわせるといふ明瞭な論理は、対象へのはたらしかけの論理へは展開せず、意識の内部で「明晰かつ判明」な性質を析出するという点に止まったのである。しかし、他者の「視線」が示唆するのは、「私」の視点からは決して見ることのできないものの存在ではないであろうか。とすれば、意識の内部、言い換えれば自己の視点の裡でそのような性質を探求するというデカルト的認識の論理は、まだ不徹底な部分を残していると考えることができる。

(二) ライブニッツ

これに対し、デカルトに対する批判から出発したライブニッツの認識の論理には、対象へのはたらきかけによってこそ、その実在的な性質が検出されうるといふ(2)の論点が含まれている。ライブニッツは、『実在的現象を想像的現象から区別する様式について』と題された短い論考において、まさにこの区別が対象へのはたらきかけを含む一連の探求によってなされる、と論じる。

ライブニッツによれば、現象が夢のような想像的なものでなく、実在的なものであることを示す標識は、主に三点ある(十三)。

(イ) 現象が生き生きしている(vividum)

(ロ) 現象が多様であること(multiplex)

(ハ) 現象が整合的であること(congruum)

この中で最も重要な標識は(ロ)現象の多様性であると、ライブニッツはいう。では、現象が多様であるということは、ライブニッツにとつていったい何を意味するのであろうか。ライブニッツによれば、「現象は、それが変化に富み、しかも多くの試験(tentamen)や新しく敷設された観察(observatio)に適っているとき、多様である」(十四)。ところで、対象となる現象を構成する諸部分に対し「試験」をおこなうということは、それにはたらきかけることによって、性質を顕現させるということである。また、一定の条件下に現象を発生させるという仕方ではたらきかけ、その結果を「観察」することも、同様の趣旨に解することができる。そしてライブニッツは、これらの「試験」および「観察」が、「想像的な現象」と「実在的な現象」を区別する方法であるという。なぜなら、「このような長い観察は、きわめて意図的になされるものであり、かつ選択

的に設定された一連のものであるときには、夢の中にも、記憶や想像がもたらす像の中にも、ふつうは生じない」(十三)からである。

このように、ライブニッツは現象へのはたらきかけによって顕現する性質を実在的なものとみなす論理を持っていた。では、想像的な性質とは異なる実在的な性質が存在するということ自体は、いったいどうやって認識されると、ライブニッツは考えたのであろうか。無論、神の「視線」によってである。注目すべき点は、この論考の中で、ライブニッツがはっきりとデカルトのいう「欺く神」の想定を拒否しているという点である。しかし、この点を拒否するということは、ライブニッツにおいては、神の存在がもはや自己の視点を否定する契機とはならない、ということを示している。つまり、自己の視点から見出される性質を超えた性質を探求すべき動機に関する論理が、ライブニッツの認識の論理には欠落している。ということは、ライブニッツの方法によって、かりに「想像的な現象」と「実在的な現象」との区別がつけられたとしても、その区別は本来の意味を持ちえないであろう。つまり、想像的な現象を超えて、実在的な現象を発見した、という意味を持ちえないであろう。ライブニッツにおいても他者の「視線」が設定されているが、それが自己の視点を想像的なものにすぎないとして否定する契機となるような論理は組み立てられていないのである。ライブニッツは、この点に気づいていたと思われる。それゆえに、このような方法で見出される現象の実在性は「蓋然的」であり、実在的な現象もじつは「判明かつ整合的な夢」かもしれないと述べているのである(十四)。

このように、ライブニッツは、実在的な現象を探求する方法の核心に、対象へのはたらきかけを設定する知覚の論理を構築していたが、その方

法が、決して人間を欺かない神によって支えられる形而上学の中に置入れられていたために、神の「視線」が私の視点の否定をもたらさなかった。そしてそれゆえに、対象の性質を「試験」と「観察」にもとづいて検出するという方法に対して、実在的な性質の検出方法という意味を、十全な形では与えることができなかったのである。

デカルトおよびライプニッツの知覚論を、三項関係モデルを使って読み直すことからえられる結論は、どちらの知覚論も実在的な性質の探求の理論としては不十分なものである、ということである。デカルトの知覚論も、ライプニッツの知覚論も、三項関係における知覚を成立させる二つの条件を同時に満たすことができない。

デカルトおよびライプニッツの知覚論が、三項関係モデルからみるといずれも不十分なものであるという点は、他者の「視線」が「神」という存在に設定されている点と明らかに関連している。「神」の「視線」から感知されるのは、人間の知覚が決して及ばないような実在的な世界の存在である。デカルトにおいてもライプニッツにおいても、実在的な世界の秘密は、ひとり神だけが握っている。したがって、人間による対象へのはたらきかけは、実在的な性質の検出作業としては認められない。神の視点から見れば、対象へのはたらきかけそのものが、人間的視点の中でなされているものにすぎないということになるからである。

デカルトにとつてもライプニッツにとつても、神の視点は決して動かすことのできない前提であった。この前提の下で、デカルトは、対象へのはたらきかけという方法を断念し、自己の意識において「明晰かつ判明」に認識される性質は実在的であると認められるという点を、神によつ

ていつきに保証しようとした^(十五)。これに対してライプニッツは、対象へのはたらきかけという方法は温存するが、その方法によつて知ることができるのは、人間の視点に相対的な現象にすぎないと考えざるをえなかった。ただし、「試験」と「観察」を経た現象は「よく基礎づけられた現象 (phenomena bene fundata)」^(十六)であり、その限りで、たんなる夢や想像からは区別できると主張したのである。

さて、ここから三項関係モデルを見直すと、いったい何が見えてくるであろうか。この点を結論として述べることで、論考をまとめてみよう。

おわりに

三項関係モデルにおける他者の「視線」は、「神」の「視線」とは異なる。他者の「視線」とは、私が自己の視点を否定する契機である。しかし、他者の視点にとつては、私の「視線」がまったく同様の意味をもっている。つまり、どのような視点も他の「視線」によつて否定されるのである。いかなる視点も、実在的な性質の知覚を独占することはできない。三項関係モデルを成立させる条件は、このような構造である。つまり、三項関係を成立させるには、ただ自己の視点が他者の「視線」によつて否定されるというだけでは、じつは十分ではなかったのである。デカルトおよびライプニッツの知覚論を検討して見えてきたのはこの点である。自己の視点が否定されるだけでなく、自己の視点を否定する他者の視点もまた否定されるものであるという構造がなければならぬ。この構造の下でのみ、いかなる視点も、対象の実在的な性質に触れること

ができる、と考えられるのである。複数の視点が相互に他を否定する契機となつて存在しており、かつそれらの視点を超越する視点(神の視点)が存在しないという条件で、三項関係モデルは成立するのである。対象へのはたらきかけによって顕現する性質を、実在的なものとみなしうる根拠は、視点の相互性に存するのである。

注

(一) ジョイント・アテンションとは、他者の「視線」が対象に向けられていることを感知した主体が、同じ対象に注意を向けるという事象を指す。

(二) Castiello, 2003

(三) Pierno et al., 2006; 2008

(四) この点は、発達心理学の分野においてなされた実験をもとに主張することができ、できるだけ簡潔にまとめると、次のようになる。模倣にかんするメルツォフの実験では、被験者である幼児が、実験者による玩具の操作を見た後、一定の時間を経て模倣ができるという点を示されている。9ヶ月の幼児では24時間後の模倣が可能であり、14ヶ月の幼児では1週間後の模倣が可能であった(Meltzoff, 1985; 1988a; 1988b)。14ヶ月では、92%が模倣に成功している。心理学的には、この実験結果は「長期記憶」の発達という観点から解釈されているが、別の観点から解釈することもできる。メルツォフも指摘するように、玩具の性質が知覚されていなければ、模倣は不可能である。では、玩具の性質(どんなふうに出るか)はどうやって知覚されているのであろうか。明らかに、実験者が玩具を操作することによって、その性質は顕現し、知覚されている、と考えられる。では14ヶ月の幼児が、はたしてその性質を記憶していたと考えられるであろう

(五)

か。むしろ、玩具の性質は、模倣の場面であらためて知覚されていると考えられないであろうか。無論、模倣の場面では実験者は玩具を操作していない。しかし、その「視線」が感知されていれば、対象の性質は知覚される。「視線」が感知されるために、それが帰属する身体の前前はかならずしも要求されないものである。記憶のはたらきは、むしろ実験者の不在を認識させることにあり、この認識が逆に「視線」を感知させる、と考えることができる。

エレンア・ギブソンは、知覚研究における「生態学的アプローチ」について次のように述べている。「知覚は、有機体とその環境との相互関係(reciprocal relation)という観点から理解されなければならない」。Gibson & Pick, 2000, p.158. ここでいう「相互関係」を二項関係と言い換えれば、「生態学的アプローチ」から三項関係が除かれていることは明白である。

(六)

ibid., p.71

(七)

通常の知覚にはつねに他者の存在が含意されており、見かけの二項関係は暗黙の三項関係になっている。では、知覚者(意識)と事物が、文字通りの二項関係に置かれたとしたら、いったいどういうことになるのであろうか。その場合には、知覚者(意識)と事物はもはや区別されないはずである。ジル・ドゥルーズは『ミシェル・トゥルニエと他者なき世界』において、そこにどのような世界が現出するかを考察している。「他者なき世界」とは、文字通りの二項関係が成立した世界である。そのような世界においては、「意識は対象を照らす光ではなくなり、事物それ自体が放つ純粋な燐光となる」(Deleuze, 1969, p.362)。このように、二項関係においては、知覚者(意識)は事物と癒合し、いわば事物それ自体が意識を持つことになる。このような癒合状態を解消し、事物から意識を分離することが他者の機能であると考えられる。この点についての私の説明は次のようなものである。注(一)で言及した「ジョイント・アテンション」の段階に入ると、幼児は大人

が注意を向ける事物に関心を示すようになるだけでなく、自分が関心をもつ事物に大人の注意を向けさせようとする。それが幼児の「指差し」といわれる行為の意味である。「指差し」とは「指示」にはかならない。つまり、事物を「対象」として「指示」するための条件は、じつは他者の存在なのである。「指示」によつて、事物は意識にとつての「対象」となる。そこではじめて「対象」の性質は、かたして知覚されうるかが問題にされるのである。以上から示されるのは、二項関係を文字通りに主張した場合には、対象の實在的な性質が問題にできないというだけでなく、そもそも事物を「対象」として知覚するということが自体が成立しない可能性があるということである。したがつて、「対象」の性質が問題になっている場合には、つねに三項関係が成立していると考えることが出来る。

- (八) 「誰だか知らない、きわめて有能で、きわめて狡猾な欺き手があり、策を講じてつじも私を欺つてくる」。Descartes, 1996, vol.VII, p.25
- (九) *ibid.*, p.31
- (十) 「私は、私が明晰かつ判明に理解するすべてのものが、私が理解するとおりに、神によつてつじへられうる」といふことを知つてくる」。*ibid.*, p.78
- (十一) Leibniz, 1996, Band 7, p.319
- (十二) *ibid.*
- (十三) *ibid.*, p.320
- (十四) *ibid.*, p.320-321
- (十五) 「欺く神」の想定は、最終的には解除され、神は欺瞞者ではなくなつてゐる。Descartes, 1996, vol.VII, p.52
- (十六) Leibniz, 1996, Band 2, p.435

文献

- Castello, Umberto, 2003, "Understanding Other People's Action: Intention and Attention." *Journal of Experimental Psychology*, vol.29 no.2
- Deleuze, Gilles, 1969, *Logique du Sens*, Minuit
- Descartes, 1996, Adam & Tannery Ed., *Oeuvres de Descartes*, Vrin
- Gibson, Eleanor J. & Pick, Anne D., 2000, *An Ecological Approach to Perceptual Learning and Development*, Oxford
- Leibniz, 1996, Gerhardt Ed., *Die Philosophischen Schriften*, Georg Olms Verlag
- Meltzoff, Andrew N., 1985, "Immediate and Deferred Imitation in Fourteen- and Twenty-Four-Month-Old Infants." *Child Development*, 56
- Meltzoff, Andrew N., 1988a, "Infant Imitation After a 1-Week Delay: Long-Term Memory For Novel Acts and Multiple Stimuli." *Developmental Psychology*, vol.24 no.4
- Meltzoff, Andrew N., 1988b, "Infant Imitation and Memory: Nine-Month-Olds in Immediate and Deferred Tests." *Child Development*, 59
- Pierno, Andrea C. et al., 2006, "When Gaze Turns into Grasp." *Journal of Cognitive Neuroscience*, 18.12
- Pierno, Andrea C. et al., 2008, "Motor Ontology in Representing Gaze-Object Relations." *Neuroscience Letters*, 430

